◇◇ 特集「英語教育はどうあるべきか」 Part 1

題材の内容とその取り上げ方

高橋　貞雄
（玉川大学）

1．英語教育と題材

中学校の英語教育は，教科のひとつとして行われる。当然のことであるが，この点が最も重要であり，また見逃されやすい点でもある。現代社会の英語化現象の中で，英語の実用や効用ばかりが突出してしまうためである。たしかに，将来を担う人材を育成する上で「英語ができる人」を養成する意義は大いにあろう。しかし，もし本当に英語ができる人を育てるのであれば，900 語と週３時間のしばりの中でどれだけのことが保証できるであろうか。英語の学習で苦労した経験のある人や英語教育に携わっている人であれば，答えは自明である。

新学習指導要領では，外国語（英語）が必修になり，「生きる力」，「自ら学び自ら考える力」，「基礎・基本」が総則として謳われている。したがって，公教育を受けるすべての子どもたちにとって必要な英語教育とはどうあるべきかを考えなければならない。また，「生きる力」，「自ら学び自ら考える力」の育成に英語教育として責任を負っていかなければならない。広義にとらえれば，基礎・基本は文法や単語の基礎・基本だけでなく，「他者とのかかわり」（つまりはコミュニケーション）や社会で生きていくための基礎・基本をも包括する。つきつめて考えていけば，英語教育の目的は「人間教育」であり，子どもたちの成長をサポートすることなのである。したがって，英語教育は単に英語というモノを教えるだけでなく，英語という言語を媒介して人間や社会のあり方を教えていかなければならない。結局は，「題材」の取り上げ方が英語教育のあり方に決定的な影響を及ぼすことになるのである。

2．題材の種類とバランス

英語の教材として，題材を取り上げる場合にどのように考えていけばよいだろうか。まず第一に考えなければならないのは教科としての性格である。英語は「ことば」である。ということは，ことばに関する題材を優先的に取り上げなければならない。とりわけ英語教育と国語教育は「ことばの教育」に責任を負っている。特に，ことばは「考える力」と密接にかかわっているわけであるから，教科としての責任は極めて重い。「ことばの題材」として取り上げる場合には，以下の３つの観点がある。１つめは，「ことばの認識性」または「記号性」である。私たちはことばを通して物事を考えたり理解したりする。つまりは，ことばとは何か，といったことに関する題材である。２つめは，「ことばの社会性」である。ことばと文化，母語と外国語，母語と民族といったことに関する題材である。英語を学ぶことの意義の多くは，こうした側面にかかわっている。３つめは「ことばの伝達性」である。通常の社会生活を営む上で重要になるいわゆるコミュニケーションの手段としての言語である。ことばの伝達性という点でいえば，手話言語も点字言語もこの範疇に入ってくる題材である。以上のようなことばに関する題材の意義をまとめれば，子どもたちの言語観を豊かにしたり育てたりする題材，ということになろう。

外国語教育で果たすべきもう１つの大きな役割は，子どもたちの世界観を広げる，ということである。世界には，さまざまな国や民族や文化があり，したがって，さまざまな生活様式や考え方がある。そうした多種多様な社会の中で共存していくためには，お互いの人権を守ることや平和を維持していくことが必須の要件である。異文化理解とは，身の回りの異文化も含めて，お互いの違いを認め合いつつ共生の道を模索していくことである。英語の教材として，平和，人権，環境，異民族・異文化などの題材を取り上げる理由は，子ど

もたちの世界観を広げ，社会性の豊かな人間に育てるという「人間教育」に根ざしている。しかし，英語教育は平和教育や人権教育だけを取り立てて教える教育ではない。そうであれば，英語教育の外でもできる。英語教育においては，ことばの教育という大きな枠組みの中で，平和や環境問題が題材のメッセージとして展開されると考えたい。

3．題材を取り上げる視点

ここで，英語教育の題材として題材を取り上げる際の切り口について，いくつかの角度から考察してみたい。

① 子どもの感性を啓発するか

題材はあくまでも子どもたちのためにある。大人の視点に立って，特定の教義を押しつけるような切り口であってはいけない。できるだけ子どもの視点に立った，子どもの感性を揺さぶるような題材でありたい。一見難しそうに見えても，子どもの感性で受け入れられる題材はいくらでもある。また，リアリティーのある題材ほど子どもの心に届く。その意味で，題材はできる限り実話でありたい。

② 発見のある題材か

題材は，馴染みがあり過ぎても目新し過ぎてもいけない。一見当たり前のような題材であっても，新しい視点や考え方が提示されれば，子どもたちにとって新しい発見へとつながる。たとえば，「英国」の題材で,「1 つの国に 4 つの国がある」といえば，子どもたちに考える視点を提供することができる。世界にはこんな生き方や考え方があるのか, と子どもたちが理解し，わが身を振り返られるようであれば，発見のある題材だといえる。

③ 楽しい題材か

最近の子どもは(いつの時代もそうかもしれないが)楽しくなければ食いついてこない。問題は，楽しさの中身である。上で挙げたように，自分の感性を揺さぶられ，新しい発見があるような教材であれば，子どもは「楽しい」と思うであろう。是非そうであってほしい。軽薄な笑いだけが楽しさではないはずである。要するに,「楽しさ」には思わず吹き出すような楽しさから世界観が変わるくらいの楽しさまで幅がある。したがって，楽しさにメリハリのある題材をそろえていきたい。

④ 深化・発展のある題材か

題材は，表現のひとつのモデルである。教材で与えられた題材を手がかりにして，思考や活動を深化させたり発展させたりできる題材がほしい。たとえば，体験学習をリポートする題材であれば，それをひとつのモデルにして，自分でもリポートを作り上げるような活動へと発展させていきたい。また，中学生はその 3 年間に思考的にも社会的にも大きく成長する時期である。であれば，同じ題材であっても子どもたちと同様に深化･発展していくべきであろう。たとえば，題材として環境問題を取り上げるとしたら，1 年生で扱う環境問題と 3 年生で扱う環境問題は自ずと異なるべきである。かりに 1 年生でリサイクルなどの身近な環境問題を扱うとしたら，3 年生では地球規模の環境を扱うといったことである。さらに，環境問題について知る，学ぶといった題材から，環境問題の解決に向けて行動する，といった題材の深化・発展があってよい。

⑤ 言語活動に適した題材か

題材にさまざまな種類があるように，題材をのせる表現形式もさまざまである。たとえば，リポート，日記，スピーチ，インタビュー，ディスカッション，手紙，詩，など枚挙にいとまがない。題材には表現形式との相性がある。手紙の題材であれば, 手紙の表現形式をとらなければならないし，スピーチであればスピーチの基本的なパターンに準拠しなければならない。いわゆる実践的コミュニケーションだからといって，対話文だけを扱うとしたら，題材のバラエティも深さも極めて限定的なものになってしまう。

4．教科書の題材と自己表現

すでに触れたが，教科書の題材は読んで理解するためだけのものでなく，生徒の自己表現を引き出すためのひとつのモデルとしての働きをする。教科書の題材は，コンテンツとしてのモデルと，表現形式としてのモデルのふたつの役割を果たしている。現在の，そして今後の英語教育の大きな課題のひとつは，いかにして生徒の自己表現を引き出すか, である。自己表現ということであれば，基本は対話文ではなく叙述文である。つまり，何かについて述べる，ということが自己表現の基本だからである。その意味で教科書の中の叙述文が果たす役割は極めて大きいと言わざるを得ない。

英語の表現形式の基本はパラグラフである，とよく言われる。最初は３文程度のパラグラフであっても，基本ができていれば徐々にきちんとしたパラグラフに基づいて自己表現ができるようになるであろう。その意味でも，教科書には良いパラグラフのモデルを提示するようにしていきたい。

5．題材のとらえ方

ここで現在の教科書の中から，いくつかの題材を取り上げてポイントを紹介しておきたい。

◆本課(LESSON)の題材

・１年６課　Alice and Humpty

英国文学・文化のエッセンスをもっとも典型的に表しているものとして，アリスを取り上げている。ここでは特にことばの記号性の観点から，「名前に意味があるか」という点を問題にしている。

〈Book 1, LESSON 6 ②〉

・２年８課　Ainu

異文化は外国だけでなく身近なところにもある（国内異文化）という点から，アイヌ民族とアイヌ語の関係を取り上げている。ことばの社会性という観点から，母語の大切さを説き，「民族の命はその言語の中にある」ということばに題材のポイントを集約している。

・３年６課　I Have a Dream

人権教育の題材である。人種差別と戦い平等を勝ち得たキング牧師の人物伝である。世界の現実を知り，共生することの難しさや大切さを考えさせる題材になっている。表現形式としてはスピーチが取り上げられ,「暗唱」やレシテーションに最も適した教材だといわれている。

・３年 LET’S READ 3　Language — Life of a People

3 年生の最後にことばの大切さをあらためて説いている。ウェールズや韓国に起こった言語的迫害の歴史を通して，民族にとっての母語の意味や母語維持教育の意義について考えさせている。最後の文の「ことばはそれを使う民族の命である」が題材の根幹をなしている。

◆ LET’S シリーズの題材

題材は本課だけでなく，話したり，聞いたり，書いたりする活動にも関係がある。つまりコミュニケーションには，How だけでなく What も重要な役目を果たすからである。これは必ずしも内容を重くするということではない。

・１年 LET’S TALK 6「許可を求めるとき」

許可を求めるときには，許可の求めかたの表現形式とともに「求める内容」が問題になる。ここでは『星の王子様』の本とその簡単な説明とが題材になっている。

・２年 LET’S WRITE 3「将来の職業」

「将来は農業をやりたい」という直前の本課のスピーチをモデルにして，自分でもスピーチの原稿を書いてみようという活動である。ここではスピーチの形式と職業について考えることが題材になっている。

・３年 LET’S LISTEN 4「地球を守ろう」

初歩的なリスニング活動にも題材を盛り込むことができる。つまり，無味乾燥な聞く活動ではなく，中身のある素材こそが聞き取る活動にふさわしいといえる。ここでの題材は，環境問題であり，ステップを踏んで聞き取る活動になっている。